



デジタル・ミュージアムトップ画面 (5月15日より公開)
 URL: <http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

井上順孝

國學院大學
 研究開発推進機構
 機構ニュース

Vol. 3 No. 1
 発行人 阪本 是丸
 編集人 松本 久史
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

目次

◆ 研究開発推進機構平成二十一年度事業計画

- ・ 日本文化研究所「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(井上順孝) 1
- ・ 日本文化研究所「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究
 ー 靈祭・靈社・神葬祭 ー」(遠藤潤) 3
- ・ 学術資料館「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用研究」
 (小川直之) 4
- ・ 学術資料館「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」(加藤里美) 5
- ・ 学術資料館「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開」(内川隆志) 6
- ・ 学術資料館「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」(加瀬直弥) 7
- ・ 校史・学術資産研究センター「國學院大學の学術資産の研究と公開」
 (齊藤智朗) 8
- ・ 校史・学術資産研究センター「國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築」
 (齊藤智朗) 8
- ・ 研究開発推進センター「招魂と慰靈の系譜に関する基礎的研究」(中山郁) 9
- ◆ 報告
- ・ 「日本国・國學院大學とアメリカ合衆国・ハーバード大学エドウィン・O・
 ライシャワー日本研究所間の協定書」に基づく交流訪問(菅浩一) 11
- ◆ 事業計画・人事一覧 12
- ◆ 彙報 14
- ◆ 資料紹介「丹生四社明神図」 16

本プロジェクトは平成十九年度より三カ年の計画で、デジタル・ミュージアムの立ち上げとその整備を研究開発推進機構全体に関する試みとして推進し、さらに独自のコンテンツ作成や国際的発信を行う。三年目に当たる平成二十一年度の事業計画は次のとおりである。

一、デジタル・ミュージアムの構築
 研究開発推進機構内の各機関と恒常的に連絡協議を行いつつ、本学の学術資産および機構の研究成果等のデジタル発信のためのシステムを構築し、展開させていくという目的のもとに実施されているものである。これはまた、学内での教育等に還元

できるように整備していくことも目指している。

懸案であった富士通が開発したミュージックというソフトを用いた新しいデータベースシステムの公開が実現したので、この整備を行う。従来ばらばらにウェブ上に公開されていたデータベースその他のコンテンツは新しいシステムに移行することとなったが、システム上の問題点があった場合はそれに対処し、より使いやすいものとしていくことを目指す。また機構のミュージックの学内の他の部署からの利用に関しての原則等を取り決め、開かれたシステムとして運用する予定である。とくに図書館のデータベースとは、緊密な連絡のもとに、國學院大學のサイト全体がユーザー・フレンドリーなものとなるように努める。

具体的には次のようなスケジュールでの研究を実施する。

①月に一回程度ワーキンググループのメンバーによる会議を開催する。昨年度導入したミュージックへの移行が順調であるかどうかを確認し、デジタル・ミュージアムの今後の運営について協議する。

②情報システム課と協力し、サーバー管理、データの不具合の調整などを行う。

③コンテンツをできるだけ広く研究・教育に資するための研究会その他を開催する。

なお、『万葉集神事語辞典』のオンライン公開もこのプロジェクトで行うが、これは辰巳正明教授が旧日本

文化研究所時代の兼担プロジェクトとして実施し、その成果として刊行された辞典がベースとなつていく。当初よりオンラインでの刊行をあわせて行うという計画であった。ミュージックが導入されたのを受けて、画像データを新たに加えてオンラインで公開する。

二、デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築

このプロジェクト独自のコンテンツの作成を行うものであり、本年度は次のような具体的な目標を立てている。

①これまでに収集した教派神道・神道系新宗教の資料の整理とデジタル化

旧日本文化研究所時代に神道教、神道修成派、黒住教の教団資料が収集された。一部は翻刻がなされ、また研究成果が論文として刊行されている。機構のデジタル・ミュージアムが構築されたので、ここにおいて、それらの一部をデジタル化してオンラインで公開する作業を開始する。これについては教団側の了解を得られたものから順次アップロードしていく。

また神道系新宗教の一つである祖神道の教団資料については、教団からの許可のもとにデジタル化とデータベース化を昨年度より開始している。資料が膨大であるので、二十一年度に完了することが困難であるが、できる限りすみやかに基礎的作業を終える予定である。

②現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集するが、本年はウェブ上の関連情報の収集を中心に実施する。

③神道関係論文の双方向翻訳(日本語文献の英訳と英語文献の日本語訳、その他の言語)

日本語文献の英訳と英語文献の日本語訳を中心とするが、その他、必要に応じて、フランス語訳、中国語訳、韓国語訳なども試みる。本年度は四本の翻訳を目標としている。

④オンライン神道事典E.O.Sの拡充

新しいシステムのもとで、動画や画像、音声をさらに追加し、神道の理解を深めてもらうための工夫をする。またもとの『神道事典』とは別に新たに作成している初心者向けのコンテンツを充実させるが、英語版が完成したら、多言語対応することを目指している。

三、国際研究ネットワークの形成のための国際フォーラム等の開催

二十一世紀COEプログラムを実施中に形成された国際的な研究者のネットワークを維持・展開させるためのものである。本年度は欧米およびアジアから、広く宗教文化に関心を抱く国外の研究者を三名程度招聘し、日本側の研究者も含めた研究フォーラムを開催する。次に述べる科研費による事業との連携を密に実施する。時期としては九月を予定している。

四、科学研究費補助金(基盤研究A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」プロジェクトとの連携

本研究課題は大正大学星野英紀教授を研究代表者とし、平成二十年度より開始された。研究分担者として本プロジェクトメンバーの井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子の三名、また連携研究者として同じく星野靖二と学術資料館の加瀬直弥の二名が加わって、この研究の推進に当たっている。この研究により目指される大学における宗教文化教育の実質化においては、本プロジェクトの研究成果も重要な意義を持つことになるため、本プロジェクトと密接に連携していく。

本年度はすでに五月にハーバード大学の後援による国際比較神話学会を共催し、参加者から内容とともに、研究開発推進機構の施設が非常に好評を得た。九月には前記国際研究フォーラムを予定している他、各種の研究会への共催を予定している。國學院大學はこの科研費が目指す「宗教文化士(仮称)」の推進に当たって、重要な役割を果たすと学外からも認識されているので、その意味でも本プロジェクトとの緊密な連携を今後も持続させる。

(本年度のプロジェクトメンバーについては十二頁の人事一覧図を参照。)

日本文化研究所

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究

— 靈祭・靈社・神葬祭 —

遠藤 潤

このプロジェクトは、靈魂観をめぐる思想形成と社会的実践を焦点として近世国学の分析を行なうものである。日本文化研究所の「神道・国学研究部門」において平成二十年度から三カ年の期間を設定して開始された。本年度はこの二年目にあたる。

このプロジェクトでは、国学の死生観や死に関わる諸儀礼について、史料にもとづく実証的な方法で明らかにする。すなわち、死や靈魂についてのテキストと実践の両方を歴史的・社会的なコンテキストにおき、それらの意味を再考しようというものであり、究極的には、近世宗教史上における日本人の靈魂観と実践の解明という重要な問題に関して、神道・国学の立場を実証することによって寄与することを目指している。本年度は下記の実施計画に沿って行うことを予定している。

I 国学の靈魂観関係の主要テキストの分析

(1) 国学者の靈魂論・幽冥論関係テキストの調査・収集、『靈能真柱』精読会、校注作業、(2) 神葬

祭関係書の調査・収集・分析

II 神葬祭・靈祭・靈社建立を中心とした社会的運動の分析

(1) 鈴門の靈祭運動と神葬祭の調査・分析

(2) 平田家のイエの祭祀の調査、平田国学影響下の幽冥思想に関する調査・研究

III 研究成果の公開

『神葬祭資料集成』増補文献リストの完成、「近世から近代初頭における国学の靈魂観」ミニ・シンポの主催、高玉家文書(翻刻)原稿作成、出版準備

以下、それぞれの内容について簡単に説明したい。

I 国学の靈魂観関係の主要テキストの分析

国文学研究資料館、国立国会図書館、国立歴史民俗博物館など都内や東京近郊の資料所蔵機関をはじめ、諸機関において靈魂論・幽冥論の関係資料の調査・収集を行う。また、『靈能真柱』精読会・校注作業については、前年度からひ

きつづき、事業担当者およびこのテキストに関心のあるポスドク、大学院生などを参加者として、『靈能真柱』の研究会を定期的に開催し、初期の版本をメインテキストに、先行の校注や研究を再検討するとともに、総合的な読解を目指して『古史伝』など他の篤胤の著作、およびそれらと深く関わる門人・関係者らによるテキストとの比較をしながら、新たな注釈作業を行う。また、『靈能真柱』の精読の成果をWEBを利用して公開するべく、テキストの体裁や公開の具体的方法などについて検討する。現在のところ、縦書でのHTMLファイル構築すべく、必要な作業を開始している。神葬祭関係書の調査・収集・分析についても、昨年度にひきつづき、『神葬祭資料集成』の増補を企図し、新規資料の収集や既刊のテキストの再検討を行う。

II 神葬祭・靈祭・靈社建立を中心とした社会的運動の分析

鈴門の靈祭運動と神葬祭の調査・分析については、平成二十年度の調査をふまえ、飯田年平を中心とした山陰地方を対象とした鈴門および関係国学者に関する史料調査を行う。また、平田家のイエの祭祀の調査として、国立歴史民俗博物館所蔵「平田家資料」および秋田県立公文書館所蔵平田家関係史料などを調査し、平田家のイエや一門における靈魂に関わる実践を明らかにする。

III 研究成果の公開

『神葬祭資料集成』増補文献リストの完成
「近世から近代初頭における国学の靈魂観」ミニ・シンポを開催し、プロジェクトのメンバーおよび外部からの発題者によって標記のテーマをめぐる議論を行うことを予定している。また、解説を進めている高玉家文書の既翻刻部分について、校正・確認や出版準備の作業を進めている。

学術資料館

「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究」

小川直之

本プロジェクトは、平成十一年度から十七年度まで文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア推進事業として行った「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」の後継プロジェクトである。同研究は、平成十八年度は日本文化研究所共同プロジェクトとして、平成十九年度は研究開発推進機構日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの構築と展開」のサブプロジェクトとして引き継がれ、平成二十年からは、学術資料館プロジェクトとして研究活動を行っている。

研究の目的

建学以来百二十五年を超える本学は、その教育研究活動のもとで膨大な学術資料を蓄積しており、「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」以来、画像資料を中心に学術資料のアーカイブ構築と成果の公開を行ってきた。本プロジェクトはこの目的のもとで、主に研究者個人を単位として学術資料のアーカイビングを行い、学内外のさまざまな教育研究に資するための基盤整備を進めている。

アーカイビングは資料のデジタル化、分類整理と保存、データベース化と情報のリレーション、公開の四段階を内容としており、これらの過

程では既存の学問領域を超えながらの学際的研究や人文資料情報学の検討など、新たな資料学の構築を目指してきた。

具体的な研究内容は、平成二十年からの本プロジェクトでは、柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵葉書のデジタル化とデータベース化を中心に進めている。

國學院大學デジタルミュージアムへの学術データベースの公開

平成二十一年五月十五日から公開されている「國學院大學デジタルミュージアム」は、現時点では十九のデータベースが収録されているが、このうち、宮地直一博士写真資料、皇學館大学神道研究所蔵原田敏明每文社写真資料、大場磐雄博士写真資料、大場磐雄博士資料、柴田常恵写真資料、杉山林繼博士收藏資料、考古学資料館所蔵縄文土器、折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料の八データベースが、本プロジェクトが引き継ぎ、整備・公開してきた「國學院大學学術データベース」から移行したものである。

本プロジェクトは、研究成果としては、これら学術データベースの充実をはかることを目指しており、現在進めている柴田常恵拓本資料や宮地直一神社絵葉書のアーカイビングについても、その進捗状況を見なが

ら、データベース公開を検討している。アーカイブの構築や公開にはさまざまな方法があるが、宮地直一、原田敏明、大場磐雄、杉山林繼、折口信夫というように、個人を単位としているのは、その学の形成と特色を尊重し、ここを起点とすることで今後の人文学等の伸展が図れると考えるからである。國學院大學デジタルミュージアムでは、「国学・神道」「歴史・考古学」「文学・民俗」という区分を設け、該当箇所に各学術データベースを配置するが、これはあくまで利用の便のためで、原田や大場などの学術データベースには、その区分を超える画像資料等が多く含まれている。

柴田常恵拓本資料と宮地直一神社絵葉書

我が国の文化財研究に大きな功績を残した柴田常恵は、すでに刊行・公開している写真資料に加え、瓦や板碑、梵鐘などの拓本資料を約六千点遺している。このコレクションは昭和三十年代に整理が行われており、これをもとにして再整理を行いながらデジタル画像化、中性紙封筒への保存措置、名称・年代・所在地などの資料情報のデータベース化を進めている。拓本の元になっている現物の所在については未調査で、今後の大きな課題となっているが、特に梵鐘については、拓本が取られた後の第二次世界大戦中には戦時物資として供出されたものが多くあると予測され、遺された拓本は地域史研究などの資料として重要な意味をもつものが含まれていると考えられ

る。平成二十年には、拓本資料のうち瓦の二千七百六十六点のアーカイビングが完了し、二十一年度は板碑や梵鐘の拓本資料のデジタル化とデータベース化を進めていく。

宮地直一博士資料についても、古文書などの写真資料についてはすでに目録を刊行し、データベース公開を行っているが、一万五千点を超えると思われる神社絵葉書のコレクションがあり、平成二十年には千三百四十二点のデジタル画像化とデータベース化を行った。絵葉書のデジタル化とデータベース化については、すでに折口信夫の歌舞伎絵葉書、神道資料館所蔵の神社絵葉書を行っており、これに倣うとともに、神戸大学付属図書館、絵葉書資料館(神戸市垂水区)の絵葉書の分類・整理法の調査を行い、改善を加えて作業を進めている。

研究フォーラムの開催など

デジタル化とデータベース化の作業とともに、フォーラムの開催や関連資料やアーカイビング方法の調査を行い、研究の深化を図っている。平成二十年には画像資料研究フォーラムⅡとして「音声の資料化とアーカイブをめぐる諸問題」と題して、台湾・南台科技大学教員などによる研究会を開催した。画像資料研究フォーラムは二十一年度にも開催し、研究の進展を図る。また、関連資料の現地調査やアーカイブに関する調査を二十一年度にも行って研究を進める。

学術資料館

「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」

加藤 里美

学術資料館(考古学資料館)では、我が国の基層文化とりわけ人々の生活と祭祀との関係を神道考古学の立場から明らかにすることを目的として、石川県加賀白山山頂遺跡(昭和六十一年)、広島県吉備津神社境内遺跡(平成十二年)、静岡県伊豆山神社境内遺跡(平成十五年)などの祭祀遺跡の調査を進めてきた。本年度から開始した「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」は、これまでの祭祀遺跡研究を継承し、日本古来の祭祀形態を有する出雲地域における磐座を中心とした祭祀遺跡とそこから出土した遺物を対象として調査を行ない、出雲ひいては我が国固有の祭祀形態とその特質を説明することを目的とする。

研究の推進にあたって、島根県教育委員会(教育長、藤原義光)と國學院大學研究開発推進機構(機構長、阪本是丸)は、出雲地域に関する研究事業の円滑かつ着実な実施のため、相互協力を目的とする協定を、平成二十一年四月一日付で締結した。

この協定は、先の通り学術資料館のみならず、伝統文化リサーチセンター研究事業で実施している関連事業と島根県古代文化センター

の事業とを対象とし、効力は当該事業終了まで継続するものである。双方は共に、出雲地域研究に関する長年の研究蓄積があり、これまでの研究成果を踏まえた出雲地域研究とその成果発信のための基盤を構築することができるとことや、共同研究を円滑に進めることが可能となることにより大きな成果が期待できる。また、当機構が外部機関との連携による共同研究を進め、地域社会への貢献も果たすことにもつながろう。

「該当する事業」

一・学術資料館研究事業「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」

二・伝統文化リサーチセンター研究事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」(文部科学省オーブン・リサーチ・センター整備事業)

三・島根県古代文化センター「基礎研究 考古学から見た地域間交渉調査、及び祭祀行事調査」

磐座については、大場磐雄氏が提唱し、本学が最も得意とする祭祀考古学にとって非常に重要な研究対象であるにもかかわらず、なおその定義は定まっていな

た、出雲には『出雲国風土記』にみえる猪石や犬石の記事を巡る研究など、全国的にも貴重な資料とそれに関する研究の蓄積があるものの、磐座そのものの調査研究は多くはない。幸いにも、本学には神道学や民俗学・歴史学など、総合的な調査研究をなしうる基盤がある。本事業は、吉田恵二を代表としてこれら本学のもつ優位性と学統の上に立って、磐座の総合的な研究を目指すものである。まず、磐座の形態・立地・自然との関わりを測量や発掘などの現地調査を通して考古学(内川隆志・加藤里美・藪下詩乃)、さらには神道学(岡田莊司・加瀬直弥)・民俗学の協力を得て、我が国固有の磐座信仰の実態に総合的に迫ろうとするもので

ある。

そのために、本年度より三カ年に渡って、調査対象として琴引山および琴引山山頂遺跡等として、まず(一)「モノ」としての磐座の属性を考古学的に把握し(女夫岩遺跡・琴引山山頂遺跡など磐座伝承地の現地調査(実測、写真撮影、GPSによる緯度・経度・高度の測定、遺跡調査カードの作成)(磐座の試掘調査)、(二)これに基づいて神道学・民俗学の見地から検討を加えその歴史的意義を明らかにする(磐座関連資料(史)料の収集と分析、全国磐座データベース作成開始)。また、ここでの研究成果については(三)調査研究報告の刊行(國學院大學考古学資料館紀要に収録)を計画している。



琴引山山頂 琴引山神社

学術資料館

「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開」

内川 隆志

平成二十年度より実施している収蔵資料の再整理・修復・公開事業は、博物館が博物館たるべき最も基礎的かつ重要な作業の一つである。

本館は開館から今年で八十一年が経過し、約十萬点にも及ぶ資料が収蔵されているが、資料全体の内容や保管場所の詳細把握など、

まだまだ未整理の部分が大きいことから資料の再整理が不可欠となっている。幸いにも平成二十年度から新しい施設の中で、これまで細々としか手を付けられなかった館蔵資料の再整理について、専任のみならず、非常勤の人員が確保され、計画的に実施できる事は、長年考古学資料館に関わってきた者として至福の極みでさえある。後世に伝えるべき学術資料の活用を見越し、個々の資料の総点検と総目録化が本事業の目指すところである。

さて、平成二十年度は、一方では伝統文化リサーチセンター資料館開館準備と並行しながらの作業であったため混沌とした状況下ではあったが、主要な個人コレクション、ならびに旧石器時代、縄文時代資料の一部について整理作業を進めることができた。野口義麿・椛島隆・小野良弘・安本收・

徳富蘇峰・上川名昭資料については、集密ラックに集約し、既に行われている図録と対比出来るように整理し直した。服部和彦氏寄贈仏教美術コレクションについては、『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅲ 仏像・仏具・考古資料』を刊行し、六百二十点の資料目録を完結することができた。

本事業に含まれる「縄文時代の大型石棒研究」については、谷口康浩准教授を中心に研究を推進し、昨年度は中部・関東地方の主要な大型石棒関連遺跡の情報収集ならびに関連報告書・論文など約百五十遺跡分の基礎文献収集を実施した。

また、当初計画にはなかったが、本館への寄贈の意志をお示し頂いている個人コレクションの内容・点数を把握するための基礎的な整理作業も実施した。遺物は、関東地方と東北地方出土の縄文時代中期～晩期の深鉢形土器十三点、古墳時代の小形壺、北海道地方出土遺物(石器)三百八十点、東北地方出土遺物(石製品・土製品)百四十四点、長野県地方出土石器(石製品)九百九点、関東地方出土石器八十七点の総数約千五百点にのぼる。本資料については近々寄

贈される予定である。

平成二十一年度は、引き続き資料全体の再整理・修復を実施するが、基本的な整理方針を取り決め、都道府県別、時代別に順次整理箱を並べ替え、その内容について詳細に記録する作業を実施する。具体的な手順としては、旧目録・受入台帳・要覧・展示資料台帳などの旧情報は、一旦そのままにし、第一段階として資料配架のアウトラインを作り、整理箱単位で資料を再整理し、収蔵資料の全体像を把握した後、整理箱の並べ替えを実施する。そういった基礎作業後、

収蔵目録の個別データを作成し、ゆく予定である。個別データの記載内容については、今のところ以下の内容を検討している。①棚番地(配架番号)・列品番号・指定、②名称、③出土地・伝来・作者、④時代・時期、⑤寄贈者・作者、⑥員数・法量、⑦所在、⑧文献、⑨図版、⑩備考。膨大な数量の資料の再整理であるため、計画を入念に実施し将来に禍根を残さないものとすべく、整理を進める一方で、計画の修正をしながら作業を実施している状況である。

三冊の図録を完結し、整理の終了した服部和彦氏寄贈仏教美術コレクション千九百四十七点については、その貴重な一括コレクションを安全に保管するため特別収蔵庫において管理している。



特別収蔵庫 服部コレクション

本コレクションについては、収蔵庫内の資料の所在を明確にするための工夫として図録に所載していると通りの順番に配架し、実物資料と照合する事を可能にすべく作業を進めている。さらに、文献資料についても情報を集約し、合わせて個々の資料のデータを同時に検索できるように工夫してゆく予定である。また、展示室内における資料公開についても検討している。

「縄文時代の大型石棒研究」については、本年度は引き続き東日本出土資料のデータベース化を行い、重要資料の実測調査および踏査を実施する予定である。踏査は、平成二十年度の資料収集の過程で選定した群馬県、静岡県などの遺跡において実施する。

公開事業については、本館と渋谷区教育委員会の共催で区立白根記念渋谷区郷土博物館・文学館において「縄文と弥生展(仮)」を行う予定であり、本館の収蔵する資料の出品と学術講演会等を計画している。

学術資料館

「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」

加瀬直弥

平成十九年の研究開発推進機構の発足に伴い、従来の神道資料館は学術資料館神道資料館部門に改組された(「神道資料館」の名は通称となった)。この組織改編は、様々な分野からの研究成果を展示に反映させ、また展示のノウハウをも吸収できる好機といえる。そこで、その基礎となる情報の収集を、当面の最重要課題と位置付け策定したのが今回紹介する「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」である。実施期間は平成二十年度から二十二年度までの間であり、この事業によって、神道資料館をはじめとする学内神道関係資料の適切な把握を行うための体制を構築することを目指す。

事業の詳細については以下の通りである。

事業計画策定の背景

昭和五十三年の発足以来、旧神道資料館では、戦前の皇典講究所礼典課や、直接の前身となる神道学資料室の資料を引き継ぎつつ、貴重な宮廷装束を今に伝える高倉家文書や、複数の神饌模型、近世以前の絵巻物や祭礼図など、特徴的な神道関係の資料を収集保存してきた。現在の総所蔵点数は約二千五百点に至り、単純な比較ではあるが、旧神道資料館発足時に比べ三倍に増加した。

これらの資料の一部は、神道の研究教育上一定の学術的価値を有するものとして、『館報』や、『装束織文集成』・『神社祭礼図の研究』といった刊行物などによって紹介してきた。こうした中、神道関係資料の学術的価値のさらなる探求のための環境整備策と位置付けられる研究開発推進機構の発足を迎えたのである。事業計画の当面のねらい

前記のような神道資料館をめぐる環境の変化を受け、より多くの研究者の研究関心を惹起させ、かつ学生や一般の方々にも神道の特質をわかりやすく理解してもらうためには、まずは収蔵資料の学術的な特質を見だし、それを明らかにすることが第一と考えた。それは、単なる美術工芸面の評価ではない。多様な文化的側面をも有する神道が、歴史的経緯をどのように経て、そしてどのようにに現代的意義を有しているか、といった面も明らかにすることを目指す。それが、真の意味での資料の有効活用につながるからである。

事業の経緯

しかしながら、「言うは易く行うは難し」の俚諺通り、即時にねらいを達成することは難しい。そこで、その対象となる資料の存在を多くの研究者に知ってもらうことから着手

し、「資料を把握するための情報の適切な提供」を、当面の目標とした。神道資料館では、これまでも展示に資する資料を選択し、それら資料の特徴などの把握に努めていたが、それを一般に公開する基盤整備は十分整えられていなかった。

そうした課題を克服するために、ごく一般的な業務であるが、今後の事業の基礎データを作成するため、事業開始時から資料情報の電子化に着手した。現在は、非公開ではあるが、名称の他、受入関連の情報の他、一部資料については、法量・様式などの情報を確認することができるようになってきている。

なお、神道資料館は、学内の展示施設・伝統文化リサーチセンター資料館における神道資料の展示協力を行っている。伝統文化リサーチセンター資料館は「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」という事業の成果展示の場である。平成二十年の開館に当たっては、この資料館の設置趣旨に即した展示計画の策定に、神道資料館の教員が主体的に参画することとなった。現在でも展示替えの際の展示資料の選定などに協力しており、その際には、当該事業によって作成された資料情報データを適宜活用している。

課題と今後の展開

従来、いわゆる資料整理に伴う作業に重点が置かれていたこともあり、これまでの作業とともに、それら資料の活用と、神道資料を中心とした研究の発展を目指すことが事業

の課題といえる。この課題を克服するために、今後、次に示す活動に重点を置き、所期の目的を果たしていきたい。

まずは、従来日本文化研究所・学術資料館が行ってきた電子化資料等をも含めた、所蔵資料の活用策の策定である。特に、神道の信仰を表現する場である神社の歴史という、本学が積極的に設定してきたテーマに即した資料の公開を、関連諸事業と連携しつつ、目指していきたい。

次に、神道研究の発展については、その対象を神道資料館所蔵資料に留まらずに、広く学内資料を用いつつ、歴史を軸とした検討の進展を期したい。具体的には神社景観などを想定している。

最後に資料が示す神道の歴史的経緯の紹介である。平成十九年度に刊行した図録『神道のカタチと心』を踏まえ、より学生等の神道史教育に特化した刊行物刊行の準備を整えてものとする。

体制

開始当初は教員二人によって推進されてきたが、平成二十一年度は笹生衛准教授(神道資料館長)・森助教・山本信吉客員教授及び加瀬がメンバーとして参画しており、神道関係研究の推進に重点を置いた体制をとった。この他、臨時雇員の協力による資料整理及び資料データの電子化も継続して実施している。

校史・学術資産研究センター 「國學院大學の学術資産の研究と公開」

齊藤 智朗

本事業は、本機構内の学術資料館、神道資料館、研究開発推進センターと提携し、さらに國學院大學図書館との協働で、國學院大學の学術資産である貴重書をはじめとする典籍や資料を研究し、その成果を図書館のウェブサイトに公開するデジタル・ライブラリーで公開していくものである。また本事業には、神道学や日本文学、日本史学などの若手研究者を配置し、本機構が取り組むべき重要な課題の一つである若手育成も図る。

本事業では、具体的に、デジタル・ライブラリー掲載の典籍・資料の「補充」と「追加」の二つのことを並行して行う。つまり、既存のデジタル・ライブラリーに掲載されている典籍・資料についての研究を行い、その解説を付記する「補充」と、学術的な価値の高い学術資産を改めて選定してデジタル・ライブラリーに新たに掲載する「追加」である。まず「補充」については、現在掲載されている典籍・資料に関連する研究を専門とする研究者が中心となって解説を作成し、作成した解説は図書館を通じてデジタル・ライブラリーに掲載する。他方の「追加」については、デジタル・ライブラリーに今後掲載すべき典籍・資料を選定し、「補充」

と同様、本事業に関わる研究者を中心に作成した解説等と合わせて、デジタル・ライブラリーで公開していく。

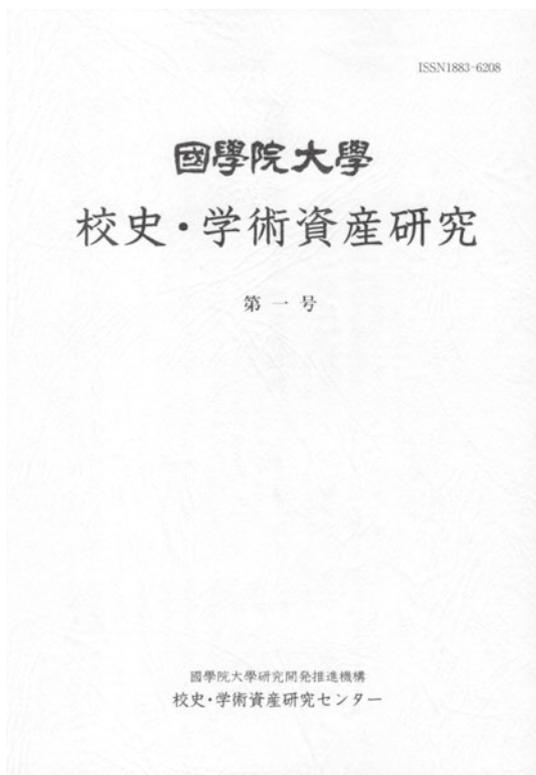
このような本事業の活動について、昨年度(平成二十年)は、学術メディア・センター(A MC)棟への移転等の影響を受け、充分に行えなかった点はあるが、現在までに本事業の体制もほぼ整い、すでに図書館所蔵の貴重書の調査を開始するなど、本格的な作業に取り掛かっている。今年度は、貴重書をはじめとする諸資料の調査・研究を進め、その成果をデジタル・ライブラリーを通じて広く発信していく。

また、昨年度創刊した本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』には、本事業における研究成果として、倉住薫「柿本人麻呂の妻」論―武田祐吉論を始点として―、笹川勲「武田祐吉博士旧蔵『古今和歌集』秋歌上について―本文と校異―」、堀越祐一「國學院大學図書館所蔵『鎌倉大草紙』について(上)」、宮原一郎「近世における諸大名の日光参詣―享保期の高槻藩主永井直期・杵築藩主松平親純の事例から―」の四本の論文・資料翻刻を掲載した。これらのうち、特に翻刻文については、デジタル・ラ

イブラリー上でも今後活用される予定である。今年度発行予定の第二号においても、國學院大學の学術資産に関する論考を発表していく。

さらに、伝統文化リサーチセンター「國學院の学術資産に見るモノと心」プロジェクトの第十一回校史・学術資産研究会(平成二十一年三月五日)において、本センターの研究員二名による報告(笹川勲「武田祐吉旧蔵『古今和歌集』秋歌上について―付、武田祐吉の学問と古

典籍―」、荒木優也「西行「ねがはくは」詠の享受―武田祐吉博士旧蔵『新古今和歌集』大夫阿闍利本巻第八末歌について―」)を行い、同プロジェクトの研究員と、國學院大學の学術資産に関する知識の共有化を図った。今年度も他機関と共同の研究会を開催して、國學院大學の学術資産に関する知識をより深めるとともに、学術資産全体の把握に努めていきたい。



『國學院大學 校史・学術資産研究』

校史・学術資産研究センター

「國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築」

齊藤 智朗

本事業は、國學院大學における校史資料の収集・保存・管理・閲覧体制の確立を目指すとともに、

國學院大學の校史に関する学術研究を行って、その成果を自校史教育に活用し、広く社会に発信する

「大学アーカイヴズ」の体制を構築することを目的とするものである。こうした本事業の目的に則り、校史資料の収集や保存を継続的に行っていくことと合わせて、文書関係の資料を中心に整理し、当該資料を活用した研究を行っていく。また、自校史教育用テキスト（コンパクトな校史あるいはテーマを特定した関係資料等）を作成するなど、将来的な國學院大學における自校史教育システムの整備を目指す。

このような本事業の昨年度（平成二十年度）における活動について、まず校史資料の収集・保存等に関しては、國學院大學、及びその母体であった皇典講究所関連の写真帳や卒業アルバムのデジタル化に着手し、当該資料の保存に努めるとともに、自校史関連のテキスト作成等で今後活用し得る写真データの収集を行った。具体的には、『皇典講究所創立五十年記念写真帖』（昭和七年刊）と、國學院大學図書館に残存する卒業アルバムを年代の古い順よりデジタル化し、卒業アルバムについては大正二年から昭和八年までの計二〇冊を完了した。今年度も右のような作業を継続していくとともに、さらに文書資料の整理・保存にも努めていく。

また、昨年度より本センターの機関誌として創刊した『國學院大學校史・学術資産研究』には、本事業における教員・研究員による

研究成果として、藤田大誠「明治後期の皇典講究所・國學院の研究教育と出版活動」と、宮部香織「堀秀成著『田令歌・戸令歌・賦役令歌』——國學院大學『河野文庫』所蔵史料の紹介——」の二本を掲載した。今年度発刊予定の第二号にも、こうした本事業を通じて得られた研究成果を発表したい。

そして、本事業における諸活動のうち、昨年度から今年度にかけて精力的に取り組んでいるのが自校史教育に関することである。國學院大學神道文化学部との協働で、今年度より教養総合「神道」科目において共通で行う「皇典講究所・國學院創立の経緯と建学の精神Ⅰ・Ⅱ」の講義のサブテキストとして『建学の精神——と題する小冊子を作成した。本サブテキストは、荷田春満の『創学校啓』による国学の学校創立の建言から、明治十五年の皇典講究所の創立とその開校式典での初代総裁・有栖川職仁親王の告諭に示された建学の精神について、また皇典講究所を母体とする明治二十三年の國學院の設立、そして明治後期における皇典講究所・國學院の展開と、大正十二年の現在地である渋谷への移転、その翌年の校旗・校歌の制定までを簡略に説明したもので、すでに当該授業において活用されているほか、新入生にも配布された。また、本サブテキストに関するアンケートも授業時に実施しており、現在、回収したアンケートの集計作業に入っ

ているところである。今後アンケートの結果を踏まえて、本サブテキストをより活用しやすいものとするよう、その改善・改訂に努めていくと

ともに、國學院大學におけるFD (Faculty Development) 活動にも活かしていきたいと考えている。

教養総合「神道科目」サブテキスト	
建学の精神と國學院大學の歩み —渋谷移転まで—	
1. 明治初期の国学者による教育・国民教化をめぐる動向	1
2. 皇典講究所の創立と建学の精神	5
3. 國學院の設立	10
4. 渋谷への移転と校歌	14
國學院大學略年譜（渋谷移転まで） 主要参考文献	19
國學院大學	

『建学の精神と國學院大學の歩み
—渋谷移転まで—』

研究開発推進センター

「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」

中山 郁

本研究事業は近代日本における戦死者の慰霊・追悼について、靈魂の形成と変容に視座をおきながら、その歴史的展開をあと付けたうえで、日本における人神や英霊に対する祭祀を「招魂の系譜」として理解する枠組みを提示することを目的としている。

本事業は、その前身となる「慰霊と追悼研究会」の発足以来、今

年で四年目を迎える。その間、戦死者慰霊研究に関する先行研究の吟味や個別事例の発表を中心とした二十四回にわたる研究会と、三回のシンポジウム、さらには学外研究者との協力によるパネル発表二回を開催した。さらに、昨年度は山口県やミタクロネシア地域において招魂社や在外慰霊碑の史料収集、調査を実施してきた。

以上の研究活動の結果、国民を戦争に駆り立ててゆく施設という靖國神社論や、「御霊信仰」に基礎を置く、「没個性的」的な祭神観、更には日本の戦死者慰霊「本来」のありかたとされてきた「怨親平等」観など、これまでの歴史学や思想史などの先行研究において自明のものとして議論されてきた概念や研究的枠組みが、必ずしも妥当なものではないことが明らかにされてきた。そのうえで、神道的な慰霊・追悼・顕彰について考えていくためには、古代・中世はもとより、とくに近世における神道祭祀と祭神観の展開を踏まえたい。そこで、改めて通史的に検証してゆく必要性が確認されるなど、目標に向かって一定の成果を得ることができた。また、本事業を通じて、本学本機構に日本における戦死者慰霊研究の拠点となることを期待する声が学外より多数寄せられていることは、大きな成果のひとつといえよう。

ておらず、本事業の目的である「招魂と慰霊の系譜」について、まだその方向性を見出し得ていないという欠点がある。

そこで、研究開始から四年目の節目となる本年度は、本機構の日本文化研究所「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究」と合同のうえ、改めて靖國神社・招魂社・護國神社の事例を中心に取り上げ、幕末から近代における、戦死者を神として祭祀する信仰や、それを支える人的基盤や制度的な展開過程について主に研究してゆく。そのために、左記の事業を計画している。

①研究会・シンポジウムの実施

本年度も「招魂と慰霊の系譜」に関する基礎的研究」事業研究会を月一回のペースで開催する。また、昨年度に引き続き、本年度も学内外の研究者と協力し協力したシンポジウムの開催と、全国的な学会におけるパネル発表を実施する。

②招魂社・護國神社の成立と展開に関する史料調査・収集

昨年度に引き続き、山口県文書館において山口県の招魂社祭祀に関する史料収集を行うほか、新たに栃木県護國神社所蔵の文書調査を実施し、地方の招魂社における祭祀と戦死者合祀の実状について明らかにしてゆく。また、靖國神社祭祀を研究する上で必須となる法令・制度を網羅的、時系列的に整理し、研究資料として本機構において活用できるようにする。

③研究成果公開ホームページの整備・充実

平成二十年度に実施した陸軍美術協会刊行の『靖國之絵巻』所載戦争記録画のデジタル化作業に引き続き、本年度は『靖國神社臨時大祭写真帳』内容のデジタル化と公開に着手する。また、②において整備した靖國神社関係法令・制度についても、年度末までにアツプロードを行う。さらに昨年度のミクロネシア地域戦死者慰霊碑調査の成果に基づき、サイパン島、パラオ本島、アングウル島の慰霊碑データベースを作成して公開する。

④研究成果の刊行

平成十九年度・二十年度に実施したシンポジウムの成果を刊行することで本事業の研究成果を社会に公開する。

以上の事業によって、神社界や社会に対する学問の立場からの貢献をはかるとともに、本センターを中心として集まりつつ

ある学内外の近現代宗教・史学等の研究者のネットワーク形成を図り、本学本機構を日本における慰霊・追悼研究の拠点とするための基盤を形成することを目指していきたい。



パラオ共和国コロール島海軍墓地

「日本国・國學院大學とアメリカ合衆国・ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所間の協定書」に基づく交流訪問

菅 浩二

本学は平成十二年七月に締結された標記の協定に基づき、ライシャワー日本研究所(以下「RI」)を中心に、ハーバード大学の日本研究・宗教研究諸機関との学術的交流を図ってきた。これまでハーバード大学より大学院生二名が博士論文作成に向けた調査のため本学を訪問、一方本学からも、研究開発推進センター所属の研究者二名がRIに客員研究者として滞在(現在滞在中の西高辻信宏共同研究者を含む)、研究交流を続けている。本学が建学以来蓄積してきた研究実績を、英語圏における日本研究の一大拠点であるRIとの交流を通じて国際的な研究動向の中に位置づけ直すことは、世界的にも重要な意義を有するであろう。その意味で、本協定を基盤とした学術活動の展開可能性は極めて大きい。

一方で昨秋以来の全世界的な金融危機の影響を受け、ハーバード大学は財政的観点から事業計画見直しを全学的に行う状況となっている。RIにあっても共同プロジェクトなど、新規の研究事業計画を起す事は難しい現状である。しかしながら協定の趣旨に顧みれば、現在はRIと当機構とのこれまでの人的交流を基盤とし、更に相互

研究協力・共同研究等への発展可能性を狙う段階にあることも事実である。そこで、交流規模としては従来の水準を基本的に維持しつつも、今後の内容的発展を模索するため、本平成二十一年二月十六日(月)より二十二日(日)まで、当機構の専任教員四名(加藤里美講師、加瀬直弥講師、星野靖二助教、菅浩二助教)と事務課員一名(小林信久書記)の計五名がハーバード大学を訪問した。具体的には、以下A、B二点の目的に即した交流の枠組み作りについて、担当者らと直接協議が行われた。

A. RI周辺の日本研究者・院生に、國學院大學との研究交流により期待される利点・長所を認識してもらうこと。

B. ハーバード大学イエンチン図書館(日本を含む東アジア文献資料を広範に所蔵)の神道・日本宗教・日本史研究関連資料の蒐集整理活動について、本学の研究者が体験的に関与、或いは助言し得る機会を持つこと。

Aは、英語圏の日本宗教研究が仏教にやや偏重している現状に対し、向後長期的に、神道研究を軸とする本学の実績を資産として、国際研究交流の人的ネットワーク

形成を目指すものである。またBは、米国での日本研究状況を、本学研究者が短期間であれ体験する機会を定期的に設けるため、同図書館の文献収集状況を視察し情報交換を行う交流事業を模索するものである。RIと同図書館は密接な協力関係にあるが別個の機関であり、この交流は、従来の本学とRIとの協定に基づく事業を進展させるものとなる。

以上二点についての協議のほか、小規模なワークショップを開催し、若手日本研究者との懇談・意見交換の機会を持つことを計画した。以下に主要な活動内容を記す(日時は現地時間)。

二月十七日(火)、午後一時より、ヘレン・ハーデカ教授、阿部龍一教授(日本宗教史研究)、ステーション・マツモト氏(RI研究事務コーディネイター)と面談(於:RI事務局会議室)。神道研究に限らない研究協力を依頼。同時に神道・日本宗教研究の国際的ネットワークについても協議、両教授より助言。

二月十八日(水)、午前十一時より、イエンチン図書館ジエーム・ス・チェン館長、日本語文献責任司書マクヴェイ山田久仁子氏と会談。同図書館との交流について協議。終了後、山田氏の案内で書庫内の日本研究関連の資料収蔵状況を視察。古代(加藤)、中世(加瀬)、近代宗教(星野)の各分野で、文献資料の揃い具合を確認。

午後四時よりハーデカ教授の講義「Shinto」に参加。この日は「神仏関係史」が主題。学生とも活発に討議。午後七時より、同大学神学部世界宗教研究センターの研究会に参加(星野・菅)。同センター所長ドナルド・スウェアラ教授(東南アジア仏教研究)らと短時間ながら懇談。

二月十九日(木)、午前十一時〜一時、RI隣接のセミナー室にてワークショップ開催。星野「The Concept of Religion in Modern Japan」、菅「A Historical Review of the Overseas Shinto Shrines」の発表を各二十分ほど行ったのち、討議を行う。ハーデカ教授、マツモト氏、RI及び隣接のコリア研究所でPD研究員を務める若手研究者ら(米国内の他大学専任講師)ほか、大学院生ら数名出席。活発な質疑応答。終了後も参加者の一部が討議を継続。

今回の訪問を通じ、上記A・Bについての必要性が双方に於いて確認され、向後更に実務的次元で具体化する道筋が協議されたことは、大きな成果である。今後は、神道・日本宗教研究分野の特定テーマを設定し、協定の趣旨を踏まえて具体的な研究交流や共同研究に歩み出すことがひとつの目標となる。国際的な研究体制の構築に向けて、更に協議を深めていきたい。

平成21年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧

平成21年4月1日付
(*は責任担当者)

機関	事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	PD研究員	研究補助員	外国人研究員	客員教授	共同研究員	
A	日本文化研究所 デジタル・ミュージアムの構築と展開	平藤喜久子 星野靖二	* 井上順孝 石井研士 ヘイダズ,ノルマン 黒崎浩行	市川 収 フレレ,チャールズ	大澤広嗣 市田雅崇	ヴァラー,モリー 李 和珍		ナカイ,ケイト 関守ゲイノー	アイフラ,アンネマリー 江島尚俊 シッケタンツ,エリック 高橋典史 武井順介 フィルス,ドロシア 山田美紀子 松本喜以子 小堀馨子 ビュテル,ジャン=ミシェル ガイタニディス,ヤニス ベルスハイム,ミカ ピナヤク,ロハニ キロス,イグナシオ	
		近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究-霊祭・霊社・神葬祭-	* 松本久史 遠藤 潤 中野裕三				三ツ松誠 小林威朗		林 淳	
B	学術資料館 近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究-柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵巻書資料を中心に-	内川隆志 加瀬直弥 加藤里美	* 小川直之 黒崎浩行		田中秀典	齋藤しおり 新原佑典				
		出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査	内川隆志 加瀬直弥 加藤里美	* 吉田恵二 岡田莊司			藪下詩乃			
		考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開	内川隆志 深澤太郎	* 吉田恵二 青木 豊 谷口康浩	伊藤博司	石井 匠				粕谷 崇 阿部常樹 姜 秉學
		神道資料の整理公開と学術的価値の探求	* 加瀬直弥 森 悟朗	笹生 衛					山本信吉	
C	校史・学術資産研究センター 國學院大學の学術資産の研究と公開	松本久史 齊藤智朗 加瀬直弥 新井大祐	* 阪本是丸 岡田莊司 千々和到 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江 太田直之 藤田大誠	堀越祐一	荒木優也 倉住 薫 宮原一郎	笹川 勲				
		國學院大學における大学アーカイブズ体制の構築	齊藤智朗 森 悟朗	* 阪本是丸 藤田大誠		宮部香織				
D	研究開発推進センター	松本久史 齊藤智朗 加瀬直弥 中野裕三 中山 郁 新井大祐 菅 浩二 森 悟朗	* 阪本是丸 太田直之 藤田大誠	堀越祐一	中村 聡 星野光樹 宮本誉士				佐藤一伯 津田 勉 西高辻信宏 岩橋克二 今泉宜子 ハンゼン,アンニカ	
伝統文化リサーチセンター	プロジェクト名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	リサーチアシスタント	外国人研究員	客員教授	共同研究員	
	祭祀遺跡に見るモノと心	内川隆志 加藤里美 深澤太郎	* 杉山林継 吉田恵二 小川直之 青木 豊 谷口康浩 笹生 衛 中村耕作	阿部昭典	加藤元康 石井 匠	新原佑典 浪形早季子	高 慶秀	小林達雄 小林青樹 西本豊弘 ケイナー,サイモン 樂 豊實 松本岩雄 内山純蔵	中村 大 宮尾 亨 細谷 葵 佐々木雅裕 栗木 崇 錦田剛志 田中大輔 川口 潤	
	神社祭礼に見るモノと心	加瀬直弥	* 茂木貞純 岡田莊司 茂木 栄 西岡和彦 太田直之	島田 潔 池谷浩一	筒井 裕 新木直安 山田岳晴	鈴木聡子 横山直正 伊東裕介		沼部春友 櫻井治男 牟禮 仁 藤澤 彰	藤本頼生 佐藤一伯 岸川雅範 小島優子	
	國學院の学術資産に見るモノと心	松本久史 遠藤 潤 齊藤智朗	* 武田秀章 大和博幸 阪本是丸 藤田大誠		渡邊 卓 戸浪裕之 大東敬明	齋藤しおり 宮川博司		益井邦夫 秋元信英 三宅守常		

平成21年度 研究開発推進機構 人事一覧

平成21年4月1日付

機構長	阪本是丸
副機構長	井上順孝
教授(兼担)	青木 豊 石井研士 岡田莊司 小川直之 千々和到 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江 吉田恵二
准教授(専任)	内川隆志 齊藤智朗 平藤喜久子 松本久史
// (兼担)	太田直之 黒崎浩行 笹生 衛 谷口康浩 藤田大誠 ハイウンス、ノルマン
講師(専任)	加瀬直弥 加藤里美 中野裕三 中山 郁
助教(専任)	遠藤 潤 菅 浩二 深澤太郎 星野靖二 新井大祐 森 悟朗
客員研究員	市川 収 伊藤博司 フレ、チャールズ 堀越祐一
ポスドク研究員	荒木優也 石井 匠 市田雅崇 大澤広嗣 倉住 薫 田中秀典 中村 聡 星野光樹 宮原一郎 宮部香織 宮本誉士
研究補助員	李 和珍 小林威朗 齋藤しおり 笹川 勲 新原佑典 三ツ松誠 ウァラ、モリ 藪下詩乃
客員教授	関守ゲイノ ナカイ、ケイト 林 淳 山本信吉
共同研究員	アイワ、アンネマリ 阿部常樹 江島尚俊 ガイテネ、イス、ヤニス 粕谷 崇 小堀馨子 佐藤一伯 シッケンツ、エリック 高橋典史 武井順介 津田 勉 西高辻信宏 ビ、ナクロニ ビ、ユテル、ジャン=ミシェル フィリス、ト、ロシヤ ヘルスハイム、ミカ 松本喜以子 山田美紀子 岩橋克二 今泉宜子 姜 秉學 キロス、ク、ナシオ ハンセン、アンニカ

平成21年度 伝統文化リサーチセンター 人事一覧

(文部科学省オープンリサーチセンター選定事業「モノと心に見る伝統の知恵と実践」推進)

センター長	杉山林継
教授(兼担)	青木 豊 大和博幸 岡田莊司 小川直之 阪本是丸 武田秀章 茂木貞純 吉田恵二
准教授(専任)	内川隆志 齊藤智朗 松本久史
准教授(兼担)	太田直之 笹生 衛 谷口康浩 西岡和彦 藤田大誠 茂木 栄
講師(専任)	加瀬直弥 加藤里美
助教(専任)	遠藤 潤 深澤太郎
助手(兼担)	中村耕作
客員研究員	阿部昭典 池谷浩一 島田 潔
ポスドク研究員	新木直安 石井 匠 加藤元康 大東敬明 筒井 裕 戸浪裕之 山田岳晴 渡邊 卓
外国人研究員	高 慶秀
リサーチアシスタント	伊東裕介 齋藤しおり 新原佑典 鈴木聡子 宮川博司 横山直正 浪形早季子
客員教授	秋元信英 内山純蔵 小林青樹 小林達雄 ケイ、サイモン 櫻井治男 西本豊弘 沼部春友 藤澤 彰 益井邦夫 松本岩雄 三宅守常 牟禮 仁 樂 豊實
共同研究員	岸川雅範 栗木 崇 小島優子 佐々木雅裕 佐藤一伯 中村 大 錦田剛志 藤本頼生 細谷 葵 宮尾 亨 田中大輔 川口 潤

【事務局】

学術メディアセンター事務部長	橋本幸典
研究開発推進機構事務課長	山口輝幸
研究開発推進機構事務課	朝比奈友 門平浩司 古越慶子 小平浩衣 須田佳代 小林信久 熱田匡紀
学術メディアセンター事務部主幹	堀内弘行

彙報

※ 伝統文化リサーチセンターの活動については『伝統文化のモノと心』(ニュースレター)をご参照ください。

会議

○全体

・平成二十年度、第六回企画委員会、平成二十一年三月十七日(火)十一時～十二時 A M C棟〇六会議室

・平成二十一年度、研究開発推進機構全員連絡会、平成二十一年四月十一日(土)十六時～十七時 若木タワー〇二会議室

・平成二十一年度、第一回企画委員会、平成二十一年四月二十二日(水)十一時～十二時十五分 A M C棟〇六会議室

○日本文化研究所

・平成二十一年度、第一回日本文化研究所所員会議、平成二十一年四月十五日(水)十一時～十三時 A M C棟〇六会議室

・平成二十一年度、第一回デジタル・ミュージアム企画委員会会議、平成二十一年五月二十七日(水)十四時～十六時 A M C棟〇六会議室

○学術資料館

・平成二十一年度、第一回学術資料館会議、平成二十一年四月二十二日(水)十六時～十七時 A M C棟〇六会議室

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会
(平成二十年十二月一日以降)

平成二十年度

○学術資料館

・公開事業 画像資料研究フォーラムⅦ「人文科学と画像資料研究—音声の資料化とアーカイブをめぐる諸問題—」

◇「研究発表音声の資料化とアーカイブ」講師 宇野淳子(本学研究開発推進機構臨時雇員)

◇「中華民国(台湾)における音声資料IT化の現状」講師 川路祥代(南台科技大学副教授(台湾))

◇「民謡の音声資料とそのアーカイブ」講師 長野隆之(本学准教授)

◇「口承文芸の録音とその文字化」講師 飯倉義之(愛知淑徳大学兼任講師)

◇討論司会 小川直之(本学教授)
平成二十一年二月二十八日(土)十三時～十七時 A M C棟〇六会議室

○研究開発推進センター

・シンポジウム「近代日本における慰霊・追悼・顕彰のA場V—戦死者と地域社会—」

発題者

◇菅浩二(國學院大學研究開発推進機構助教)「戦死者祭祀の場としての「神社」—栃木県と台湾の事

例を中心に—」

◇本康宏史(石川県立歴史博物館学芸専門員)「軍都の「慰霊空間」と国民統合—石川県の事例を中心に—」

◇羽賀祥二(名古屋大学大学院文学研究科教授)「戦争・災害の死者の「慰霊」(供養)—一八九〇年代の東海地域を中心として—」
コメンテーター

◇高木博志(京都大学人文科学研究所准教授)

◇大原康男(國學院大學神道文化学部教授)

◇藤田大誠(國學院大學研究開発推進機構助教)
平成二十一年二月十四日(土)十三時～十八時三十分 A M C棟常磐松ホール

平成二十一年度

○日本文化研究所

・関連学会 第三回国際比較神話学会議、国際比較神話学会(International Association for

Comparative Mythology) 平成二十一年五月二十三日(土) 二十四日(日) AMC棟常磐松ホール、同〇六会議室

出張

平成二十年度

菅浩二・加瀬直弥・加藤里美・星野靖二・小林信久 研究開発推進センター

今後の研究協力について実務的に協議するため、アメリカ合衆国ハーバード大学ライシヤワー日本研究所・イエンチン図書館、平成二十一年二月十六日(月) 二十二日(日)

・黒崎浩行・齋藤しおり・新原祐典 学術資料館 「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究」事業による調査のため、絵葉書資料館(神戸市)・神戸大学付属図書館、平成二十一年二月十六日(月) 十七

日(火)

・中山郁 研究開発推進センター 「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」事業による調査のため、パオ共和国アンガウル島・コロル島、平成二十一年二月十九日(木) 二十四日(火)

・齊藤智朗・藤田大誠 校史・学術資産研究センター 「國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築」事業による本学校史関連資料の調査のため、岩瀬文庫(愛知県西尾市)、平成二十一年三月十二日(木) 十三日(金)

平成二十一年度

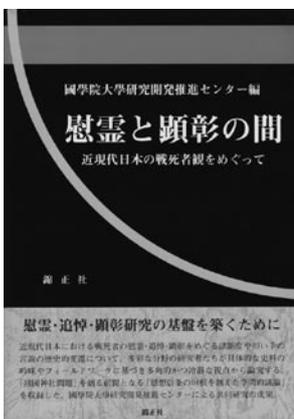
・内川隆志・藪下詩乃 学術資料館 「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」事業のため、島根県飯南町教育委員会ほか、平成二十一年六月十二日(金) 十三日(土)

刊行物

・『万葉集神事語辞典』國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編(平成二十年六月三十日発行) B5判 二七二頁



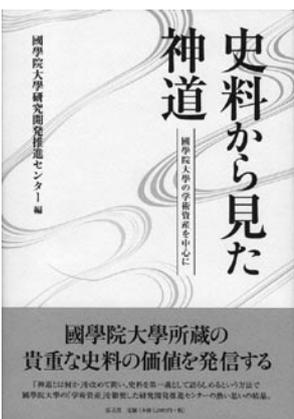
・『慰霊と顕彰の間―近現代日本の戦死者観をめぐって―』國學院大學研究開発推進センター企画・編集(錦正社、平成二十年七月十五日発行) A5判 三二八頁、定価三二〇〇円(税別)



『服部和彦氏寄贈資料図録 Ⅲ 仏像・仏具・考古資料』國學院大學研究開発推進機構学術資料館(考古学資料館)編(平成二十一年三月三十一日発行) B5判 一六八頁



・『史料から見た神道―國學院大學の学術資産を中心に―』國學院大學研究開発推進センター編(弘文堂、平成二十一年三月三十一日発行) A5判 三七六頁、定価五六〇〇円(税別)



資料紹介 丹生四社明神図

真言宗の根本霊場・高野山(和歌山県伊都郡高野町)の中枢にあたる壇上伽藍には、「御社」と呼ばれる社がある。その御社にまつられる丹生明神、すなわち丹生都比売神には、山を開いた空海に広大な土地を譲渡した、という伝承がある。その伝承は、伊都郡域・紀伊山系の奥まで至る広い地域の地主神として、丹生明神は丹生都比売神社(和歌山県伊都郡かつらぎ

町)を拠点に人々の崇敬を集めていたことを示唆するものといえよう。やがて鎌倉時代になると、少なからざる他の神々がそうであるように、丹生明神も、その崇敬を具象化する図が、関わりの深い神などととも描かれるようになる。丹生明神の図には、初期の作例によく見られるような、空海と、神社及び御社に共に鎮まる高野明神とともに描かれたものもあるが、

今回紹介する神道資料館所蔵の「丹生四社明神図」(掛軸一幅)のような構図——右上に丹生明神・左上に高野明神、下の右に気比明神・左に巖島明神を配した構図——は、四社相並ぶ丹生都比売神社の神々を明らかに意識したものである。原型は鎌倉時代後期から存在するが、江戸時代には定型化し、数多く流布するようになる。資料館のものはその定型化したもので、そのことは、社壇と狛犬の存在、黒白二匹の犬の場所から理解できる。実際、この丹生四社明神図には、原装の上巻に「寛保元年五月吉日承之 名迫次郎右衛門伊光^{十六}」と書

かれており、寛保元年(一七四一)に完成していたようである。実際図の様式を考えれば、この時期に描かれたものと考えて差し支えなからう。そういった意味では、この図はごく一般的なものということになるが、しかしながら、原装上巻の年紀に続いて記されている「名迫次郎右衛門伊光」という名は注目されよう。この名迫伊光は、実は生きながら神として奉られた人物として、中田法寿『高野の生神』(小堀南学堂、昭和九(一九三四)年)でも紹介されている。伊光は、高野山東麓・丹生明神鎮座伝承にゆかりのある富貴村(今の和歌山県伊都郡高野町)の庄屋であった。在任中の享保年間(一七一六—一七三五)に飢饉が起きたのであるが、伊光は私財をもって村民を救い、かつ、年貢の減免を領主であった高野山に願い出るなどして、村民のために尽力した。そのことが、村内で生神「名迫明神」として祀られるきっかけとなり、現在に至っているのである。神道資料館蔵品に記された伊光の年齢は伝わるどころと一致しており、何らかの関係があることは指摘できるが、具体的な関係解明は今後の課題である。



(加瀬直弥)